



◎寝肥

むかしめうつらかなる
おんなありしが
ねふれる時は
その身座敷中にとり
いびきのこゑ
車のとゞろくがごとし
これなん世にねぶとり
といふものにこそ

何だいちよぼ暮れてるねえ又公——と、伝法な口調で言い乍ら、おちかは又市の肩口を叩いた。月代くらい剃りなよみつともない、それじゃあまるで逃散百姓の体だ、折角の色男も台無しだアねと続けざまに語って、語り乍ら女は又市の向かいに腰を下ろす。

面倒臭エと又市は思う。

おちかは麴町辺りに巢喰っている女で、普段は小料理屋の手伝いなどをしている。その昔は巾着切りだったと噂に聞いたが、真実のところは又市も知らない。

知る必要もないし、知りたくもない。

いづれ真つ当な女ではない。それが証拠に、大した関わりもないというのに、おちかは又市が江戸に舞い戻つてからずっと、又市達の周りに纏わり付いている。

後ろ暗い処がある者は微暗い場所に群れるもので、付き合いたくなくとも顔見知りにはなるのである。

「俺ア元来水飲みの倅だ。お前の言う通り地べたア捨てた、帳外れだよ」
投げ遣りに言う。

ふん、とおちかは鼻を鳴らし、横に置いてあつた茶碗ちやわんの中味を土間に捨てて、徳利から酒を注いだ。

「何だい何だい、まったく嫌こなるじやないかその物言いは。辛気臭しんきくさいつたらないさね。それでも上方で鳴らした小股潜りの兄さんかね」

「その呼び方は止よせよ」

そう言つて、又市はおちかから徳利を取り上げ、自分の杯に安酒を注いだ。

「小股潜りてエなあ悪口あくこうだろうがよ。面と向かつて言う科白せりふじゃあんめえが。少しは遠慮てエものを知れ」

「悪口言われて困るような玉かい又公。今更善人面ぜんじんづらしたい訳でもあるまいに、小悪党に小悪党と言つたまでのことさ。遠慮も何もあるもんかい」

「お前みてエなあ悪場あば擦れに言われたくねエと言つてるんだよ。そもそも俺アな、小股でも大股でも、そんな他人様の股座またごうア潜るような細こけえ了見りやうけんは持ち合わせちやいねえんだ。おい、おちか。大体俺ア双六すごろく売りだぞ。双六売りつてのはな、頭から風呂敷被ふろしきつてるのがお約束なんだ。月代つきしろなんざ剃かるこたねエンだよ」

能く言うよとおちかは搦からむ。

「その、べらべら回る減あからず口が小股潜りの証あかしじやないか。上方でどう呼ばれたのかは知らないけど、このお江戸じゃア、あんたみたいなのを小股潜りと呼ぶんだよ」
知るかいと又市は横を向く。

「煩瑣うるせエのはお前の方じゃねエかよ、おちか。俺わ一人で飲んでエんだよ」

「はあ、判わつたよと猫撫ねなで声を出しておちかは又市の顔を覗き込んだ。

牝おんなの香りがして又市は顔を背ける。

「判わつたつて——何が判わつたてんだ」

「お葉よちゃんのことたろう」

——ままつたく。

面倒臭めんどくせエ。

青いねエと言いつて、おちかは科しなを作る。

「お前まへさん健気けんげに通とほい詰しめていたからねエ。まあ糸の切れた凧たみたいにふらふら働はたらかない双六すごろく売り

にやあ、馴染なじみ娼妓じやうぎの身請みうけけなんざア最初はつしから無理むりだ。無理と承知しょうちの北国ほくごく通とほいだつたんじやない

のかえ。花街はなまちで惚ほれた腫はれたは野暮天やぼてんの科白しぱくさ」

そんなじゃねエと返答たたまをしかけて又市は言葉ことばを肚はらに吞のむ。語かたつたところでどうにもならぬ。お

や黙だまり天神てんじん決きめ込こむかえと、おちかは更に搦なむ。

「まあ、それにしたつてあの娘むすめも因果いんぐわだ。慥たしかこれで四度目よどめだろうに。まああの器量きりやうだからね。

請うけ出したはいいけどさ、まあ老おいいらくの恋こひさ。助平すけへい爺ぢども、精せいも根ねも吸すい取とられちまつておつ

死ちぬんだろうよ」

それにしたつて四度よどめは多いねえ、三度目さんどめの正直ただしいつて謂いうけど一回いちど越こしちまつたじやないかと、お

ちかは更に酒さけを注つぐ。

「魔性と言われても仕方がないね」

「俺の酒だぜ」

又市はおちかの茶碗ちやわんを掴つかむ。

あた吝じけ気ないこと言うンじやないよとおちかは呪にらむ。

「何かい、惚れた女を魔性と貶けなされて肚はらでも立ったのかえ」

「いちいち気に障さぶる女おんなだな。口が減らねエのはお前めえの方じやねエか。搦なむンじやねエよ。魔性でもコン畜生でも構わねエンだよ。身請みうけけした爺やイがくたばるなア天命だ。そんなこたアどうでも好いいのさ」

「どうでも好いつて面相じやないよ」

「どうでも好いたらどうでも好いのさ。俺アな、自慢じやねエが擦すれつ枯からしだ。お前の思つてる程青かねエやい。惚れただの好いただの、しち面倒臭めうくエこたア性に合わねエし、妬やくの嫉ねたむのする程に真つ直ぐでもねえよ。くたばり損ぞんないの耄碌もうろく爺やが何人死しのうと知つたことじやねエ。そいつらが皆、お葉の腹の上でくたばつたんだとしたつて、そりや偶たま偶たまだるうぜ。だからそんなこたアいいんだ」

「じゃア何がいけないのさ」

「あいな」

本当に面倒臭いと又市は思う。女という奴は何故こゝも根掘り葉掘り聞きたがるのだ。

「お前、妙だと思わねエのかよ」